

初級用ビデオクリップ集の作成と使用

坂 野 永 理・佐 藤 美 穂・梅 川 ゆう子

Developing and Using the Video Clips for Beginners

Eri BANNO, Miho SATO, Yuko UMEKAWA

要旨

本稿は著者が作成した初級日本語学習用ビデオクリップ集について報告するものである。まず、ビデオ教材の利点について述べた後、今回作成した教材の作成方法と教材の内容を説明する。作成したビデオクリップ集は70以上のビデオクリップからなる。各ビデオクリップは一つの文型または表現に焦点を当て、その文型または表現が出てくる短い会話やナレーション付きの映像からなっている。作成は文型または表現の抽出に始まり、スクリプトの作成、ビデオ撮影、編集という過程を経た。また、ビデオクリップの実際の授業での使用方法を二例紹介し、ビデオクリップを用いた指導の有効性についても述べる。

キーワード：ビデオ教材、ビデオクリップ、日本語、初級、作成

1. はじめに

語学教育において映像と音声を含むビデオやDVD教材は有効な教材と考えられているが、外国語としての日本語教育用に作成されたビデオやDVD教材は非常に少ない。凡人社 (2013) には日本語学習用ビデオ・DVDの一覧が記載されているが、過去5年以内に出版されたビデオ・DVD教材は、VHS教材の内容をそのままにDVD化したものに限られ、新たに出版されたものは見受けられない。

近年、ビデオカメラや編集ソフトが普及し、自分でビデオを撮影し、その編集をパソコンで行うことが容易になった。また、インターネット上に自作ビデオをアップロードすることも簡単に行えるようになっている。このような状況の下、市販のビデオ教材に頼るのではなく、教師が自ら学習者に合ったビデオ教材を作成し、それを教室内外で視聴させることも可能となっている。

本稿は、著者が作成した初級日本語学習用ビデオクリップ集について報告するものである。まず、ビデオ教材の利点について述べた後、今回作成した教材の作成方法と教材の内容を説明する。そして実際の授業での使用方法を紹介し、最後に今後の課題を述べる。

2. ビデオ教材の利点

ビデオ教材の利点としては以下が挙げられる。

1) 動機づけを強化する

言葉のみでの説明よりも映像を示すほうが、学習者の興味は湧きやすい。石田 (2000) は、視

聴覚教材は学習意欲を高め、動機づけを強化するとし、種々の研究結果がこれを実証的に裏付けていると述べている。動機づけが強化される具体的な状況として、国立国語研究所（1995）は、目標言語を第二言語としてではない状況で学ぶ場合、ビデオによりその言語が使用されている場所の様子を教室に持ち込め、動機づけを高めることができるとしている。山下（1992）はビデオ教材は表現活動への動機づけになるとし、ビデオで状況を示し、それに関する質疑応答などをすることにより、意味のある表現活動に導いていくことができると述べている。

2) 現実に近い場면을提示し、理解を促進する

山下（1992）は、ビデオ教材は言葉を現実に近い場面の中で意味のある自然な形で提示することができる」と指摘している。学習項目を教室内で提示する場合、実際にどのような状況でそれを使用するのが理解させるのが難しい場合がある。ビデオは、その学習項目が使用される現実に近い状況を提示することができ、それにより学習者の理解を促すことができる。

3) 非言語情報や社会的、文化情報を提示する

身振り、表情などの非言語情報や、社会的、文化的な情報は、教室内では伝わりにくいこともある。山下（1992）は、非言語情報の一つとして、様々なお辞儀のしかたについて触れ、ビデオはどのような状況でそれが使い分けられているのかを提示することが可能であると述べている。また、古別府（2002）は、ビデオが「依頼する」、「詫げる」などの際に必要なコミュニケーションストラテジーを画面で提供することにより、意識的に学習者が学ぶことができるとしている。国立国語研究所（1995）は、目標言語が使用されていない環境で擬似的に背景文化を体験する方法としてビデオ教材の必要性を説いている。

4) 記憶の定着を促進する

国立国語研究所（1995）は、認知心理学の研究結果として複数の感覚を通して得られた記憶の方が、一つの感覚のみを通した場合に比べて定着率が格段に高いことを紹介している。辻（2008）は二重符号化理論（Paivio, 1986）を理論的背景として、言語と非言語の両者を用いることによる学習効果について言及し、視聴覚教材の有効性を述べている。清水（1993）は、聴覚のみ、視覚のみ、視覚と聴覚の両方という三種類の刺激を受けた場合の記憶の保持率を調査し、視覚と聴覚の両方を使用したほうが記憶の保持率が高いことを示した。映像と音声の両方を提示するビデオ教材は、複数の感覚を刺激し、記憶の定着の面でも効果があると考えられる。

3. ビデオ教材の作成

作成したビデオクリップ集は、70以上のビデオクリップからなる。各ビデオクリップは、一つの文型または表現に焦点を当て、その文型または表現が出てくる短い会話やナレーション付きの映像からなっている。作成は、以下の手順で行った。

3.1 文型・表現の抽出

岡山大学の「日本語1」のクラスでは、「初級日本語げんきⅠ第2版」（坂野他, 2011）を教科書として使用しているため、これに沿ったビデオクリップを作成するのがクラスで使用しやすいと考えた。まず、教科書で学習する文型・表現の一覧を作成した。一覧には、スクリプトが作りやすいよう、それぞれの文型の持つ機能も入れた。スクリプト作成の過程で、統合や削除等によ

り変更が行われたが、最終的に作成したビデオクリップの文型・表現及びタイトル一覧は資料1のとおりである。

3.2 スクリプト作成

リストに記載された各文型・表現について、その文型・表現を含む短い会話を作成した。作成は、担当を決め、一人が案を作成し、その案を作成者全員で一つ一つ検討していくという方法をとった。スクリプトの作成にあたっては、以下の点を考慮した。

1) 既習語彙と既習文型を使用してスクリプトを作成する

学習する文型が導入される課までに習った語彙と文型で理解できるようにスクリプトを考えた。これは、(1) 語彙や文型の定着には何度もそれに触れさせることが必要である、(2) 知らない語彙や文型が多いと視聴しても理解できない、との理由からである。

しかしながら、初級前半の段階では、使用できる語彙が限られたものであるため、既習語彙のみでのスクリプト作成は難しい部分があった。そのため、未習語彙もやむを得ない場合には入れることにしたが、その場合には映像による理解の助けや、字幕による英語訳の表示を行うようにした。以下は教科書第2課の「これ・それ」の文型のビデオクリップである。

(ケーキの形の消しゴムの映像)

A: (消しゴムを指さしながら) すみません。それは何ですか。

B: これですか。(食べるふりをするが食べない) 消しゴムです。

(その消しゴムで字を消している映像)

「消しゴム」という語彙はこの段階では未習だが、上記のように最後に消しゴムとして使っている映像を入れることにより理解可能となると考えられる。

2) 自然な状況の会話にする

ほとんどの初級日本語教材では、丁寧体(です・ます体)が使用されている。「げんきⅠ」でも、1課から丁寧体が使用され、普通体は8課で導入される。作成開始時には、家族で丁寧体の会話をさせるという案もあったが、現実には家族間では丁寧体は使用されないため、教師と学生など、自然に丁寧体が使われる場面での会話の作成を心がけた。また、文型の提示もなるべく自然な状況でその文型が現れるようにした。例えば、普通体を学習項目とするビデオクリップでは、以下のように男子学生と女子学生、そして女子学生の母親との会話とし、男子学生が丁寧体と普通体の両者を使い分けて話すスクリプトを作成した。

(男子学生が待っている。女子学生とその母親が近づいて行く。女子学生が手を振る)

男子学生: (母親に向かって) こんにちは。たろうです。

女子学生: 母です。

女子学生の母: (男子学生に向かって) こんにちは。よろしく。

男子学生: (女子学生に向かって) じゃ、行く?

男子学生: (母親に向かって) じゃ、行きますか。

3) 学習する文型を複数回提示する

第二言語習得研究においては、習得過程における気づきの重要性が唱えられているが (Schmidt, 1990), 学習する文型を一度だけ提示しても、それに気づかせるのは難しい。文型を何度か提示したほうが、気づきも行われやすく、その文型が使用される状況や意味の理解も容易になる。そのため、学習する文型が複数回現れるようスクリプトを作成した。以下は「～てはいけない」を学習項目としたスクリプトである。

(テスト中の教室。学生Aがお菓子を食べ始める)

教師：Aさん、食べてはいけませんよ。

(学生Bは大きく「×」を書いた紙を画面に向けて見せる)

(学生Cがとなりの人の答案を覗いている)

教師：Cさん、となりの人のテストを見てはいけません。

(学生Bは大きく「×」を書いた紙を画面に向けて見せる)

(学生Cが携帯電話で調べている)

教師：Cさん、電話を使ってはいけませんよ。

(学生Bは大きく「×」を書いた紙を画面に向けて見せる)

4) 単に二人の人物が会話をしている場面を映すのではなく、映像によって内容理解が容易になるようにする

以下は「～たことがある」を学習項目としたスクリプトの第一稿である。

A：Bさんはホームステイをしたことがありますか

B：ええ、したことがありますよ。

A：どうでしたか。

B：とても楽しかったですよ。Aさんは？

A：私はまだホームステイをしたことはありませんが、夏休みにしたいと思っています。

実際にありそうな会話だが、このスクリプトを映像にした場合、AとBがお互いに会話をしている様子を写すだけでは映像は理解の助けにはならず、「～たことがある」を使う状況もわかりにくい。また、ビデオを見ている側も二人が会話している様子を見るだけでは興味が湧かない。映像による理解を促進するために、以下のスクリプトに変更した。

(日本人A, 外国人B, Cが話している)

A：これを食べたことがありますか。(梅干しを見せる)

(梅干しの映像と共に「うめぼし」という文字とその英語訳を画面に出す)

B：はい、あります。

C：いいえ、ありません。

A：じゃ、Cさん、どうぞ食べてください。

C：(梅干しを食べる) う～ん (まずそうな顔)

(別の食べ物、飲み物で会話が続く)

梅干しを映し、実際に食べるシーンを映像で見せることにより、状況がわかりやすくなる。また、「梅干しを食べる」という外国人が普段しないことを聞くことで、「～たことがある」が使われる場面についても理解しやすくなると考えられる。

5) 学習者の動機づけを強化するために、学習者が見て面白いと思える内容にする

前節でビデオ教材の利点として「動機づけを強化する」ことを挙げたが、より強い動機づけのために、学習者の興味を引き、自ら進んで見たいと思えるような内容にすることが必要であると考えた。具体的には、学習者が実際の場面で使えると思える会話や、見て面白いと思える「オチ」のある会話などを入れることにした。例えば、一つ、二つなどの助数詞の会話は、以下のスクリプトを作成し、実際の大学内のカフェテリアの従業員に出演してもらい撮影した。

学生：すみません。アップルパイを二つとコーヒーを一つください。

店員：アップルパイを二つとコーヒーをお一つですね。300円です。

ありがとうございます。

店員：(品物を渡しながら)こちら、アップルパイを二つとホットコーヒーです。

ありがとうございました。

また、比較の会話では、ゲームに参加しているという設定で、罰ゲームとしてタバスコを入れたコーヒーを飲ませるといった状況のスクリプトを作成した。

司会：今からゲームをしましょう。日本と韓国とどちらのほうが大きいですか。

A：はい！(手を挙げる)

司会：はい、Aさん、どうぞ。

A：日本のほうが大きいです。

司会：正解です。では次の問題です。日本とフランスとどちらのほうが大きいですか。

(中略)

司会：残念。フランスのほうが大きいです。

(紙コップが二つあり、その中にコーヒーが入っている。コップにはそれぞれ「A」「B」と書いてある)

司会：じゃ、Bさん、コーヒーを飲んでください。あ、ちょっと待ってください。

(司会者がタバスコを取り出し、二つあるコーヒーの一方に入れる。)

司会：はい、Bさん、どうぞ。AとBとどちらのほうがいいですか。

3.3 撮影

撮影は家庭用ビデオカメラ一台を使い、音声用のピンマイクを一つ使用した。照明器材がなかったため、光や雑音、アングルなどにも気を配りながら撮影を行った。出演者及び撮影者は、予算の都合上、プロのスタッフの雇用が不可能であったため、学生や教員の協力を得た。

経験のないスタッフや出演者による撮影ということもあり、撮影したビデオには種々の面で問題が見受けられた。まず、スクリプトを読む限り問題がなかったものでも、映像にして学生に見せると理解が難しいものがあった。採用できないと思われたものは、スクリプトを書き直し、取り直しを行った。音声面の問題としては、マイクが一つしかなかったこともあり、音が小さいビ

デオがいくつかあった。これについては、編集作業で大きくできるものは大きくした。映像面では、強調したい部分がアップになっていない、画面が切り替わる時のつなぎの画像がない（例：店に入る前の会話と入った後の会話の間に店に入る画像がない）などの問題が見受けられた。アップの画面やつなぎの画像は、取り直せるものは取り直しを行った。

3.4 編集

編集は、windows用のコンピュータソフトEDIUS NEO [バージョン3] (2011) を使い行った。これについても、学生スタッフの協力を得た。編集作業は、タイトル及びテロップの挿入、画像の編集に加え、効果音の挿入も行った。また、発話が速すぎたり、不明瞭で理解が難しい部分があること、視覚として文字を表示したほうが記憶に残るという点から字幕も挿入した。字幕の表記は、2課まではひらがなのみ、3課以降は漢字ルビ付きとした。

4. 教室での使用

4.1 ビデオクリップの使用方法

作成したビデオクリップは、岡山大学全学日本語コースの「日本語Ⅰ」のクラスで使用した。このクラスは日本語未習者を対象にしたクラスで、「初級日本語げんきⅠ第2版」(坂野他, 2011)の第1課から第10課までを学習する。授業ではいろいろな使用方法を試みたが、例として以下に2つ紹介する。

使用例1

目的：

1. 導入としてビデオを視聴させ、その文型がどのような状況で使用されるか理解を促す。
2. ビデオクリップと同じ状況を教室に設定し、実際の状況で「～と思います」を使い、文型を定着させる。

学習文型：「～と思います」

ビデオクリップのタイトル：「食べ物だと思います」

ビデオクリップの内容：

シーン1：ゲームの司会者と参加者A、Bがいる。3人の前に机があり、机の上には段ボールの箱が置いてある。箱はカメラ側からは中身が見えるようになっており、中におもちゃ風のボールペンが入っている。箱の上に手を入れる穴が開けてある。Aは箱の中の物が何かわからないため、恐る恐る箱の中に手を入れる。

司会：それは食べ物だと思いますか。

A：いいえ、食べ物じゃないと思います。

司会：じゃ、何だと思いますか。

A：おもちゃだと思います。

司会：(ボールペンを取り出す) これはボールペンです。

シーン2：箱の中にみかんが入っている。

Bは箱の中の物が何かわからないため、恐る恐る箱の中に手を入れる。

司会：それは食べ物だと思いますか。

B：はい、食べ物だと思います。

司会：何だと思いますか。

B：みかんだと思います。

授業の流れ：

(導入)

- ① ビデオのシーン1を視聴させる。
- ② ビデオをシーン1の最初に戻し、Aが箱に手を入れたところでビデオを止める。「～と思います」が使用される状況の理解を助けるために、教師は映像のボールペンを指差ししながら「Aさんはこれを見ません」など、既習語彙を使い、状況を説明する。ビデオの続きを見せながら、学生が理解できていないと思われる語彙は、その場でビデオを止め、字幕を見せて表記と意味を確認する。
- ③ シーン2まで視聴させた後、教師が「～と思います」の意味用法を説明する。

(練習)

- ④ ビデオに出ていたのと同じような段ボールの箱と、財布や箸など、語彙としてその課までに学習した物をいくつか用意する。
- ⑤ ビデオと同様、学生に箱の中に手を入れさせ、中の物が何か推測させ、「～と思います」を使って表現させる。

使用例2

目的：

1. 復習としてビデオを視聴させ、学習文型が実際に使われる状況を理解させる。
2. 登場人物の個々の動作を学習文型を使って答える練習から、ひとまとまりの状況説明の発話につなげる。

学習文型：「～ている」

ビデオクリップのタイトル：「雑誌を読んでいます」

ビデオクリップの内容：

English café(大学内の英語学習用スペース)に、雑誌を読んでいる学生、コンピュータを使っている学生、テレビを見ている学生、犬と話している学生がいる。

ナレーション：ここは大学のラウンジです。

ゆうやさんは雑誌を読んでいます。(画面ではゆうやが矢印で示される)

れいかさんは犬と話しています。(れいかが矢印で示される)

くみさんはコンピュータを使っています。(くみが矢印で示される)

ゆたかさんはテレビを見ています。(ゆたかが矢印で示される)

授業の流れ：

- ① 学習文型の説明と練習が一通り終わってから、ビデオを一度視聴させる。
- ② 二度目の視聴では、学生が理解していないと思われる語彙について、途中でビデオを止め、字幕を見せて表記と意味を確認する。
- ③ 三度目は、ナレーションが一人目の学生の動作を説明したところでビデオを止め、教師が「～さんは、何をしていますか」と質問し、「～ています」を使って答えることを促す。引き続きナレーションが学生の動作を説明したところで随時ビデオを止め、同様の問答を繰り返す。
- ④ ビデオの最初に戻り、ナレーションが「ここは大学のラウンジです」と言ったところでビデオを止める。画像に写っている人物の名前を確認する。学生を指名し、スクリーンの前で画像の人物全員についてナレーションのように説明するように指示する。

4.2 ビデオクリップを用いた指導の有効性

ビデオクリップを用いた指導については、以下の有効性があると考えられる。一つ目は、学習文型・表現の導入教材として有効であるということである。今回作成したビデオクリップは一つの文型・表現に焦点を当てたものであるため、授業で使用した際は、導入としてその文型・表現を明確に提示でき、それらが使われる状況や意味用法を短時間で理解させることができた。また、ビデオの内容が学生たちの興味を引くものであったため、学生たちが自らすすんでビデオを見たいという気持ちになり、積極的に聞いて理解しようという姿勢が見られた。通常の授業では教師が絵や実物を用意して導入を行う場合も多いが、導入や説明方法を考え、教材を作成するなど、教師が準備にかける時間はかなりのものである。ビデオクリップを使用することにより、このような準備の時間が減り、導入にかかる教師側の負担が軽減されることもビデオクリップ使用の利点の一つであろう。

二つ目は、理解から産出への自然な移行を可能にするということである。上述の使用例1では、学生にゲームの様子を見せ、「～と思います」が使われる状況を理解させた後、実際に同じような状況をクラス内に作り、学生に「～と思います」を使って発話させた。また、使用例2では、「～ている」の使われる状況を理解させた後、その映像を使い、学生に「～ている」を使って説明させた。ビデオクリップはこのように聞いて理解するという受容活動だけではなく、話すという産出活動にも使用することができる。そして、その理解から産出への移行は、使用例1や2で示したように、自然な流れの中で無理なく持っていくことができる。

三つ目は、母語話者同士の会話のインプットを与えることができるということである。インプットの重要性は第二言語習得研究においては広く知られているところであるが（村野井，2006；白井，2012など），初級学習者が理解できる母語話者の会話のインプットを与えることは非常に難しい。今回作成したビデオクリップは初級学習者をターゲットとし、語彙や文型も限られたものを使用したため、母語話者同士の自然な会話のビデオとは言い難いが、初級学習者が理解できる範囲での自然な会話を心がけてはいる。このビデオクリップを使用することにより、授業で会話形式のインプットを多く与えることが容易になる。授業では、自然なスピードの会話についていけない学生も見受けられたが、そのような場合は、字幕を利用して確認したり、何度も視聴させたりして、理解を促すことができた。また、学生はビデオクリップの会話を注意深く聞いており、自分で発話する際にもなるべくそのイントネーションやスピードに近づけようと意識していた。このようにインプットを与えることにより、より自然な日本語の発話へと促すことも可能である。

ビデオクリップを用いた指導法は、上で紹介した以外にもさまざまな方法が考えられる。教材を有効に使用できるかどうかは教師の裁量によるところが大きいですが、ビデオクリップは、教師の工夫次第で非常に有効な教材となり得ると考える。

5. まとめと今後の課題

本稿では初級日本語学習用ビデオクリップ集の作成について、ビデオ教材の利点を述べながら、その作成過程及び使用方法についての報告を行った。今回のビデオクリップ集は使用している初級教科書の学習項目に沿って作成されたものだが、本教材の使用により、学習者に興味を持たせながら、学習項目に対する気づきやそれが使用される状況の理解を促すことができた。また、教材で取り上げられた状況を基に、場面の中での学習項目の産出活動へとつなげることもできた。

今後の課題としては、まずビデオクリップの内容の改良が挙げられる。今回スクリプト作成には3節で述べた点を考慮して行ったが、ビデオクリップによっては、学習する文型の提示頻度が

少なくわかりづらいもの、状況設定がわかりにくいものなどもあった。このようなビデオクリップの SCRIPT を書き直し、よりわかりやすいビデオクリップにする必要があると考える。課題の二点目は、技術面での改良である。音声が小さかったり、映像がわかりにくいなど、撮影した後に視聴して問題のあったビデオクリップは撮り直しや修正を行ったが、問題のあるビデオクリップはまだ残っている。引き続き修正や撮り直しを行う必要がある。三点目は、ビデオクリップ集の公開である。作成したビデオクリップ集は、作成者で使用するにとどまらず、他の日本語教育現場でも使用してもらいたいと考えている。このためにインターネット上に本教材を置き、それを公開できるように検討していきたいと考える。

引用文献

- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（2011）『初級日本語げんきⅠ 第2版』ジャパンタイムズ
- 凡人社（2013）『日本語教材リスト2010-2011』凡人社
- EDIUS NEO [バージョン3]（2011）[コンピュータソフトウェア] グラスバレー
- 古別府ひづる（2002）「日本語教育実習生によるビデオ教材使用の有効性」『山口県立大学国際文化学部紀要』8, 43-51.
- 石田敏子（2000）『改訂新版日本語教授法』大修館書店
- 国立国語研究所（1995）『日本語教育指導参考書21視聴覚教育の基礎』大蔵省印刷局
- 村野井仁（2006）『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店
- Paivio, A. (1986). *Mental representations: a dual coding approach*. Oxford, England: Oxford University Press.
- Schmidt, R. W. (1990). The Role of Consciousness in Second Language Learning. *Applied Linguistics*, 11(2), 129-158.
- 清水康敬（1993）『教育情報メディアの活用』第一法規
- 白井恭弘（2012）『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店
- 辻義人（2008）「視聴覚メディア教材を用いた教育活動の展望-教材の運営・管理と著作権-」『小樽商科大学人文研究』115, 175-194.
- 山下早代子(1992)「ビデオ教材の可能性－ICU初級日本語映像教材"イメージ"(試用版)をめぐって－」『ICU日本語教育研究センター紀要』02, 143-154.

資料1 初級用ビデオクリップの表現・文型及びタイトル一覧

課	文型・表現	タイトル
あいさつ	おはよう（ございます） こんにちは こんばんは さようなら おやすみなさい ただいま お帰みなさい ありがとう（ございます） いただきます いってらっしゃい いただきます ごちそうさま（でした） はじめまして よろしく申し上げます	greetings 1.おはよう greetings 2.ありがとう greetings 3.いただきます greetings 4.いただきます greetings 5.はじめまして
1	電話番号 XはYです 助詞「の」 XはYです 助詞「の」 疑問文 XはYです 助詞「の」	telephone number self-introduction introducing someone meeting someone for the first time
2	これ／それ／あれ／どれ この／その／あの／どの＋名詞 ここ／そこ／あそこ／どこ だれの＋名詞 助詞「も」 名詞＋じゃないです	なんですか いくらですか どこですか だれのでんわですか これも100えんです わたしのノートじゃないです
3	動詞（現在） 助詞（場所）「に」／「を」 時の表現 助詞「に」 動詞（現在 疑問文／否定文） ～ませんか 頻度を表す副詞	basic verbs 1時に昼ごはんを食べます 何時に起きますか いっしょに見ませんか よくデートをします
4	Xがあります／います Xがあります 位置を表す表現（右／左／前／後ろ） XはYの前です 名詞（過去） 名詞／動詞（過去） 動詞（過去） ～時間	図書館があります クラスがあります location words バス停は銀行の前です 大学生でした 日本語のクラスがありました 日曜日に何をしましたか 何時間寝ましたか
5	形容詞（現在） 形容詞（過去） 好き／嫌い ～ましょう	basic adjectives 楽しかったです どんな映画が好きですか 食べましょう
6	～てください ～てもいいです ～てはいけません te-formによる接続 ～から（文末） ～ましょうか	聞いてください 写真を撮ってもいいですか 食べてはいけません ゲームをして、寝ます テストがありますから 持って来ましょうか

課	文型・表現	タイトル
7	～ている（動作の進行） ～ていた ～ている（状態） 形容詞／名詞 <i>te</i> -form ～が、～ 動詞語幹 + に行く	雑誌を読んでいます 何をしていましたか この人を知っていますか どんな人でしたか 古いですが、安いです 勉強しに行きます
8	くれた話し方（現在） （現在）と思います （現在）と言っていました ～ないでください 動詞 + のが上手です 助詞「が」	informal speech 食べ物だと思います カラオケに行くと言っていました 開けないでください 切るのが上手です 私が持って行きます
9	くれた話し方（過去） （過去）と思います ～ている人 助数詞「～つ」 ～から（文中） まだ～ていません	デートはどうだった？ 男の人だったと思います 雑誌を読んでいる人です コーヒーを一つください おいしいから、食べてください まだ来ていません
10	二項比較 三項以上の比較 形容詞／名詞 + の ～つもりだ 形容詞 + なる どこかに／どこにも だれにも 助詞「で」（手段）	どちらのほうが大きいですか どれが一番大きいですか 大きいのがいい 勉強するつもりです 大きくなりました どこかにありませんか だれにも言わないでください 新幹線で行きます
11	～たい ～たい／～たくない ～たり～たりする ～ことがある	どこに行きたいですか 早く飲みたい 音楽を聞いたり、勉強したりしました 食べたことがありますか
12	～んです ～すぎる（動詞） ～すぎる（形容詞） ～ほうがいいです ～ので ～なければいけません ～でしょう	頭が痛いんです 食べすぎました 大きすぎます 勉強したほうがいいです 食べすぎたので、お腹が痛い 掃除しなければいけません 結婚するでしょう

